

## 女城主・井伊直虎

講談師 一龍斎貞花

大河ドラマ。初回から笑いがあり、

柴咲祐圓登場後も、お家危機という苦悩がありながら笑いがある。苦境に陥った時明るさはむつかしいが、苦境の時こそこの明るさを忘れてはいけません。トップがしかめ面ばかりでは、部下は不安を募らせることになりましょう。

主家の今川から、統治力不足と、地頭職を剥奪され城明け渡し。家老の小野但馬守が城代に。お家乗っ取りです。井伊直親（亀之丞）遺児虎松を、奥三河の鳳来寺へと逃がします。

「この母が男子を産んでおれば、あなたにこんな苦労はさせなかったものを、すまぬと思っております」

「母上、井伊家はまだ滅んではおられません、虎松がおります。必ず虎松を

もって再興させます」

家康の信任厚い松平源太郎が、夫直親を殺され未亡人となった虎松の母日夜を見染め、是非妻にと望まれ、家康との縁を深くしようと再婚を決意。

井伊家に忠誠を尽くす、近藤康用、鈴木重時、菅沼忠久の井伊谷三人衆は、徳川方となり家康の助けを借りて井伊谷城奪還に成功。

今川が盛んな時には手を下せなかった小野を追及、山の中の鍾乳洞に四ヶ月近く隠れていた但馬守を捕らえ処刑。永年の怨みを晴らします。

遠江の支配者になった家康は、馬を引くのは退却につながるので縁起が良くないと、引馬を浜松と改め本城と致します。ここから天下取りに立ち上がったところから出世城と申します。

浜松城へ行って頂きますと、私の講談ビデオが流れています。

京に劣らぬ都と言われた駿府の町は、信玄によつて焼き払われ、井伊家を苦しめた今川家没落。

元龜三年三方ヶ原の戦い、家康は大敗北を喫し浜松城へ逃げ込みます。信玄は、民家ばかりか龍潭寺まで火にかけ、井伊谷の畑は武田の兵に踏み荒らされてしまった。しかし信玄はこの陣中で病死。

天正二年十二月十四日  
「老師様、母上様、虎松只今戻りました」

今川が亡び、もう大丈夫と直親の十三回忌法要を営むにつき、六年ぶりに虎松を呼び戻します。  
「大きゅうなられましたな」

「ハイ、あと半月で十五歳になります。お寺まで焼打ちされたのですか」  
伽藍ごとごとく焼け、残ったのは塔頭松岳院のみ。

「井伊家再興が私の役目。老師様、信玄亡き武田より徳川と思います。家康殿は、必ず天下に名を上げる御人と見ました」

「うむ、祐圓、わしも同じ考えじゃ」  
井伊家再興へ

明くる天正三年二月十五日、  
家康は、三方ヶ原の東、大菩薩山の麓で鷹狩り。信玄に大敗を喫したことを忘れぬよう、毎年ここで鷹狩りを行う。普通なら縁起が悪い所と敬遠するでしょうが、流石家康ならでは。

「殿、目通りを願う者がおります」  
「左様か」

馬から降り平伏している者の処へ  
「井伊肥後守直親の嫡男虎松と申します。何卒ご家中の端にお加え頂きたく、お待ち申しております」

「井伊殿のお子とな。さればそこにおられる尼殿は、もしや次郎法師直虎殿か」

「ハイ」  
「女ながら男名を名乗り、男に負けぬ女子と思うていたが、ハハハッ、優しき姿違うておったわい、そなたのお子か」

「いえ、養母にございます」  
「瀬名(築山御前)とは縁戚だそうな」  
「ハイ、瀬名様の母君は井伊直平(祐圓の曾祖父)の娘でございます」

「左様か。虎松と申すか、よい顔つきじゃ、幾歳じゃ」

「十五歳にござります」  
「すると信康より二つ三つ下か、なに又従兄弟と申すか、そうか、ついて参れ」

その夜家康は、浜松城大広間に家臣を集めます。

「井伊直親嫡男虎松と申します。何卒お見知りおき下さいますよう」

「虎松は、わしに味方しようとして命を落とした者の子じゃ、報いてやらねばならん。三百石をつかわす。名を万千代と改めよ、井伊家を再興するのじゃぞ」

「ハッ、有難き幸せにございます」  
大名ではないとはいえ、地頭職の名門井伊家の跡取りと聞き家臣も納得。

家康は、賢く眉目秀麗の万千代をすつかり気に入って、いつも側におき、「万千代、万千代」と可愛がる。

「万千代、万千代」と可愛がる。といつて、決して寝所に呼ぶことはありません。

家康は、丈夫な子を産みそうな女性に目をつけ、十五妾十六人の子供と言われているが、調べ拙著「戦国武将に学ぶ生き残りの戦略」に書きました「二十二妾二十二人の子供、後家さんが七人。六十八歳の時には十二歳のお梅を可愛がっています。つまり性欲の処理と、子孫の繁栄を図る現実派の家康です。」

天正四年、武田勝頼に奪われた高天

神城の奪還戦、万千代十六歳の初陣。寝所に忍び込んで家康の寝首をかこうとした曲者を、次の間に宿直をしていた万千代が気付き見事討ち取った。

「万千代、天晴れ、初手柄じゃ」

更に水の手曲輪を攻めて落城させ、家康は、三百石から三千石に加増。

「井伊谷をそちに与える」

祐圓にとって念願の井伊家再興  
「城も、領地も領民もすべて井伊家に返ってきました。私の役目が果たされました」南溪も大喜び。

万千代は、家康の側にあつて、家康の心の動きを察するなど家康に心酔し敬愛。徳川と北条の和睦交渉に、元服前の万千代が無事和睦をまとめ、この功により駿河国安倍郡四万石。討ち死にした武田の勇将山縣昌景の赤備えの軍団を与えられ、万千代はその赤備えを徹底し総て赤に統一。いつも先陣をつとめ満天下にその名を轟かせた井伊の赤備えです。二十一歳と遅かったものの晴れて元服し、井伊兵部少輔直政を名乗ります。

祐圓は、待ち望んだ万千代の元服を

見届けることなくその前の年、天正十年八月二十六日永の眠りにつき、戒名、妙雲院殿月泉祐圓大姉。龍潭寺に、つましく小さなお墓。

「母上のお陰で井伊家は生き延び、再興することができました。あとは必ず私が栄えさせます。何卒お守り下さい」養母祐圓の墓に手を合せる直政。

その後六万石から十二万石。関ヶ原合戦に一番手柄を立て、石田三成の旧領佐和山六万石を加増され十八万石の大名に出世。徳川四天王と称えられ、戦いの傷がもとで四十二歳の若さで亡くなりましたが、井伊家はその後彦根三十五万石。徳川譜代の筆頭として幕末まで重きを成し続け、大老井伊直弼がとことん徳川のために力をふるったのも、初代直政の心を受け継いでいればこそでありましょう。

女性として時代に流されることなく、自分の判断で生き方を決め井伊家再興へ、女ながら男名を名乗り波乱の人生を送りました女城主井伊直虎の一人席。